

姉妹の臭いお仕置き？

俺——^{まつしま}松島ミツハルは悩んでいた。

「すう・・・すう・・・」

原因は俺の目の前で眠る少女。

身長は160cmしかない俺より高い170cm。

顔立ちは愛らしくも大人びており、綺麗な黒髪を脇の辺りまで伸ばしている。

すらりと長い肢体とは対照的に、Eカップという堂々たる巨乳で、尻もキュッと引き締まっている。

彼女の名前は、松島フミカ。

宝陽学園の2年生で、クラス委員長で、才色兼備な俺の1つ上の姉である。

「すう・・・すう・・・」

彼女は両手で枕を抱き締め、気持ちよさそうに寝息を立てている。

俺たちに両親は仕事の都合で家を空ける事が多い。

そんな両親に代わって家事を一手に引き受けている彼女だ。

俺たちが思っている以上に、疲れが溜まっているのかもしれない。

「・・・」

本来なら、このまま寝かせておいてやるべきなのだろう。

だが、俺にはそうもいかない事情があった。

理由は簡単。

彼女が寝ているのは俺のベッドで、此処は俺の部屋なのだ。

「おい、姉貴。寝るなら、自分の部屋で寝ろよ」

乱暴に起こすのは気が引けるので、軽く彼女の身体を揺すってみる。

「んっ、んん〜っ・・・」

しかし、姉貴は俺の手から逃れるように寝返りを打っただけだった。

「起きろって・・・ん？」

再び姉貴を起こそうとしたところで、爪先に何か当たった。

視線を下げると、ベッドの下から1冊の本が顔を覗かせていた。

その表紙は——

(マ、マズイ！)

慌ててその場にしゃがみ込み、件の本を手取る。

姉貴が起きる前に気付いてよかった。

此処に隠しておくのは危険と判断し、別の場所に移すべく立ち上がる。

直後、

ガチャッ。

部屋のドアがノックもなしに開いた。

「ミツハル〜」

一拍遅れて、1人の小柄な少女が俺の名前を呼びながら部屋に入ってくる。

セミロングの髪を首の辺りで束ねた、活発そうな美少女だ。

彼女の名前は、松島トモカ。

身長は俺とほぼ同じ 158 c m。

四聖学園〇等部の3年生で、陸上部のエースで、体力自慢な俺の1つ下の妹だ。

顔立ちは姉貴によく似ているのだが、首から下は・・・まあ、今後に期待の成長に期待しよう。

「悪いんだけど、ちょっと辞書貸して・・・っ!？」

ふいにトモカが言葉を詰まらせる。

その視線の先には俺が手にしている1冊の本。

こちらへ割り開いた尻を突き出した裸の女性が表紙に印刷された、一般にエロ本と呼ばれるもの。

「っ~~~~!!？」

たっぷり10秒ほど掛けて、トモカが顔を紅潮させながら再起動する。

次の瞬間、

「ごはっ!？」

陸上部で鍛えられた脚力を最大限に活かした、トモカのローリングソバットが俺の腹に食い込んでいた。

*

5分後。

俺は姉貴とトモカの前で正座していた。

「こんな本買うなんて何考えてるのよ、バカ兄貴！」

顔を真っ赤にしたトモカが俺のエロ本を床に叩きつける。

「すみません」

下手に反論すると火に油を注ぐ事になるので、俺は素直に頭を下げた。

一方、

「トモカの言う通りですよ。わざわざこんな本を買うなんて」

姉貴の方は怒っているというよりは呆れている感じだ。

「これはお仕置きが必要ですね。ミツハル、そこに寝転がりなさい」

「えっ？」

「早くしなさい！」

「は、はい！」

姉貴に言われるまま、俺は訳もわからず床に仰向けで寝転がる。

「そのまま動いちゃダメですよ」

そう言った直後、

ずしっ！

姉貴がスカートをたくし上げて俺の顔に座り込んだ。

俺を視界に飾り気のない白いショーツが広がり、

「ぐっ！？」

同時に、酸っぱい匂いと腐卵臭の混ざった悪臭においが俺の鼻に流れ込んでくる。

「ちょっ、姉さん！？何してるの！？」

予想外の展開に、トモカが驚きの声を上げる。

「ミツハルが2度とそんな本を買おうなんて思わないようにするんです。こうやって・・・

んっ！」

姉貴が息み声を上げた瞬間、

ブブブウウウーッ！！

彼女の尻から人肌の熱風が放たれた。

「むぐっ！？」

間を置かず、濃厚な腐卵臭が俺の鼻を襲ってくる。

「ちょっと臭い目に遭ってもらえば、女の子のお尻に興味を持つ事なんてなくなるでしょう？」

「それは、そうかもしれないけど・・・」

「んっ！」

ブウウウウウウーッ！！

「むうううううっ！？」

戸惑うトモカを他所に、姉貴がさらに強烈なオナラを俺の顔に浴びせてくる。

「どうですか、ミツハル？どんなに可愛い女の子でも・・・んっ！」

ブボボボオオオオー——ツツ！！

「オナラはこんなに臭いんです……んっ！」

ブブブッスウウウウー——ツツ！！

「わかりましたか？わかったら、もうあんな本を買ってはいけませんよ」

「むぐぐぐ……！」

オナラの^{におい}悪臭に悶えながら、俺は姉貴の尻の下で頷く。

「わかってくれたようですね。では、改めてお仕置きを始めましょうか」

「むうううううっ！」

姉貴の言葉を聞き、俺は抗議の声を上げる。

しかし、

「今までののは単なる事実確認です。本当のお仕置きはこれからですよ」

姉貴は事もなげにそう言い放った。

「では、行きますよ……んっ！」

ボッフウオオオオオオオオー——ツツ！！！！

「むうううううっ！？」

今まで以上に強烈な^{におい}悪臭が鼻の中で暴れ回る。

まるでボウルいっぱい腐った卵の中に、顔を押し込まれたような感覚。

全身がビクビクと痙攣し、頭の中が黄土色に染まっていく。

「今日は徹底的に反省してもらいますからね……ふんっ！」

ブビビビビビィィィィ〜〜〜ツツツ！！！！

「んむううううっ！？」

「まだ叫ぶ元気があるみたいですね……ふんっ！」

プップウウウウウウ〜〜〜ツツツ！！！！

「むううう・・・っ！」

「まだまだ行きますよ・・・ふんっ！」

ブボォッ！！ブブウッ！！ブバスッ！！

「ううっ・・・」

休みなくオナラを浴びせ続けられ、徐々に意識が遠退いていく。

(た、助けて、くれ・・・)

「えっと、姉さん。もうそのぐらいで・・・」

俺の惨状を見かねたのか、トモカが助け舟を出してくれた。

「そうですね。私からのお仕置きはこのぐらいにしましょう」

そう言うと、姉貴が俺の顔から立ち上がった。

俺がホッと胸を撫で下ろしたのも束の間、

「次はトモカがお仕置きしてあげてください」

姉貴がとんでもない事を言い出した。

「お仕置きって、私もミツハルの顔にその、するの・・・？」

「はい。私だけじゃなくて、どんな女の子でもオナラは臭いという事を、ミツハルに教えてあげてください」

「で、でも・・・」

「・・・」

乗り気でないトモカに対して姉貴が何やら耳打ちすると、

「もうっ！わかったわよ！」

彼女は半ばヤケ気味に頷いてしまった。

さらに、

ずしっ！

そのまま勢いよく俺の顔へと座り込んでくる。

「むぐっ！？」

同時に、少し湿り気を帯びたアウターゴムのショーツから酸っぱい匂いが鼻に突き刺さってきた。

「こんな事になったのも、全部ミツハルのせいなんだからね！反省しなさい・・・んっ！」

トモカが息むと、

ブボボボボオオオオオオオーツツツ！！！！

彼女のAnalから爆音のオナラが放たれた。

「っっっっ！？」

キャベツ畑を丸ごと腐らせたような、姉貴以上に強烈な悪臭においを浴びせられ、俺は声にならない悲鳴を上げる。

「いいですよ、トモカ。その調子です」

「ね、姉さん！お腹押さないで・・・んあっ！？」

ブビビビビビビビビビビイイイイ〜〜〜ツツツ！！！！

「っ〜〜〜！？」

姉貴に腹を圧迫されたらしく、トモカがさらに凶悪な悪臭においを浴びせてくる。

「ほらほら、もっとお仕置きしないと、ミツハルがまたあんな本を買っちゃいますよ」

「んんっ！」

ブウブブブブブブブブブウウウウウウツツツ！！！！

姉貴に促され、トモカが3発目のオナラを放つ。

「っ・・・・！」

その猛烈な悪臭においを浴びても、俺にはもはや声を上げる事すらできない。

「も、もう十分だよね！？」

早口で言いながら、トモカが俺の顔から腰を上げる。

「あら、まだ3発しか出してませんよ？もっとたっぷりお仕置きしないと」

「だ、だって・・・」

さらなる放屁を促す姉貴に対し、トモカが赤面して俯く。

「わかりました。では、こうしましょう」

姉貴は何かを思い付いたように言うと、

ずしっ！

再び俺の顔に座り込んできた。

しかし、今回は顔の右半分に腰掛ける格好になっている。

「1人でお仕置きするのが恥ずかしいなら、一緒にお仕置きしましょう。これなら恥ずかしくないでしょう？」

「っ！？」

慌てて彼女の下から脱出しようとするが、

「ダメですよ、ミツハル。まだお仕置きは済んでないんですから」

すぐに姉貴の手が俺の頭を押さえ込んでくる。

「ほら、トモカも早く反対側に座りなさい」

「わかったわよ！座ればいいんでしょ、座れば！」

そう言いながら、

ずしっ！

トモカが俺の顔の左半分に腰を下ろしてくる。

現在、俺の顔には姉貴とトモカが背中合わせで座っている格好だ。

「じゃあ、せーのでオナラしますよ。せーのっ！」

ブボボボボボボボオオオオツツツ！！！！

顔に浴びせられたのは、姉貴のオナラだけだった。

「っ~~~~！？」

それでも十分に強烈な腐卵臭が鼻から流れ込み、全身がビクビクと痙攣する。

「トモカ！一緒にお仕置きするって言ったでしょう！」

「だ、だって・・・」

「だって、じゃありません。次はちゃんと出してくださいよ。せーのっ！」

「「んっ！」」

今度は2人の息み声がユニゾンし、

ブウウウウウウウウウウウツツツ！！！！

ブブブブウウウ—————ツツツ！！！！

2人のアナルから同時にオナラが放たれた。

「っっっっっ！？」

肺の中がオナラ色に染まっていくような感覚と共に、意識が急速に遠退いていく。

だが、

ブブプウウウウウウ〜〜〜ツツツ！！！！

何の前触れもなく放たれた姉貴のオナラに、沈みかけた意識を強引に引き戻される。

「ふふふ、気絶して楽になろうと思ってもダメですよ」

「こうなったら、あんたが女の子のお尻を見るのも嫌になるぐらいお仕置きしてやるわ！」

何処か楽しげに言う姉貴に対し、トモカもヤケ気味に続けてくる。

「ふんっ！」

ボッフウオオオオオオオーツツツ！！！！

ブブブスウウウウウウウウーツツツ！！！！

「っっっっっ！？」

再び浴びせられたダブルオナラに、俺の意識がまた遠退いて、

ブブブウウウウウウーツツツ！！！！

先程と同じように、姉貴のオナラで強制的に覚醒させられる。

ブビビビビビビビィィィ〜〜〜ツツツ！！！！

ブブブブブブブブブブブブブブーツツツ！！！！

そんなオナラ地獄をどのぐらい味わっただろうか。

「ふう、このぐらいお仕置きしておけば大丈夫でしょう」

姉貴がようやく俺の顔から腰を上げてくれた。

それに倣い、トモカも俺の顔から立ち上がる。

「えっと・・・生きてるよね？」

「オナラぐらいで死んだりしませんよ。ミツハル、心から反省しましたか？」

「・・・」

俺は最後の力を振り絞って首を縦に振る。

「もう2度とあんな本を買いませんね？」

「・・・」

必死にもう1度頷く。

「わかりました。では——」

姉貴が穿いていた白いショーツを脱いだかと思うと、

ずしっ！

そのまま俺の顔に座り込んできた。

ショーツがなくなり、姉貴の尻の感触がダイレクトに伝わってくる。

本来ならその柔らかな感触に酔い痴れるところなのだろうが、今の俺にはショーツというフィルターがなくなった姉貴の尻は恐怖の対象でしかない。

「この1発で許してあげます・・・ふんぬっ！」

姉貴が彼女らしからぬ雄々しい息み声を上げた瞬間、

ブリリリリリリリリリリリリリリリイイイイイイツツツ！！！！

姉貴の尻から本日最大のオナラが放たれる。

「！」

その想像を絶する壮絶な悪臭においに、俺は声すら上げる事なく意識を失った。

終